

京都大 中村秀仁助教、「Nプロジェクト」の躍動 社会一般に対する 科学技術振興の新たなアプローチ

科学技術政策研究所(現、科学技術・学術政策研究所)より「ナイスステップな研究者2011」に選定された京都大学複合原子力科学研究所の中村秀仁助教が科学技術振興で新たなステップを踏んだ。

中村助教は、一般の高校(大阪高等学校)を舞台に、同高校教員並びに全校生徒約2000名と協力(通称「Nプロジェクト」)しながら、社会の大半を占める文系層を含めた科学的リテラシー涵養のプロトモデルを開発した。教育業界や関連学会から科学技術振興への新たなアプローチ創生として注目を集めている。中村助教は、科学に理解ある社会を目指して2006年から18年間に及び科学教室



京大複合原子力科学研究所の中村秀仁助教。1978年10月生まれの45歳



を全国展開する中で、「学びのインプットだけでは生徒個人の経験値蓄積に留まり、科学的リテラシーを涵養するほどの主体性には達しない」という結論に至っていた。そこでNプロジェクトでは、インプットした内容を自身が咀嚼した上で一般市民に対して説明する、というアウトプットの選択肢を年間通じて継続的に生徒及び教員に提示し、自ら生まれ持つ主体性を開花しやすい環境を整えていった。その選択は責任感と呼び起こすと同時にパブリックからの評価・声援によって自己肯定感の著しい向上につながった。結果、文系を含む現役高校生の科学技術振興企画参画への自主性が次々と主体性へと切り

系ルリ替わり始めた。今春開催されたNプロジェクト活動をおさめたドキュメンタリー映像の一般上映会では、11月11日(水)に京大の講義を聞くだけの受動的な学習姿勢から、自ら先端科学を調べ、考え、他者に説明するまで成長した文系を含む多くの生徒の姿が、学びのインプットとアウトプットの反復による効果への驚きと大きな感動を呼んだ。今秋、中村助教らのグループは、大阪府吹田市の初等教育の現場(吹田市立第六中学校、吹田市立吹田第二小学校)でさらなる展開を図る予定だという。